

生命保険の生い立ち(生まれたところ)

J. G. Anderson, M.A. 著

目次

	原文の ページ数
序文	7
生命保険の生まれた場所	9
生命保険創世記	16
I	16
最初の契約	16
申込書の様式	18
被保険利益	20
保険期間	20
加入年齢	22
医学的診査	23
II	27
カレンダーの変更	30
最高保険金額(保険金額の上限)	33
Old Amicable(アミカブル生命)	37
III	41
第 15 代 Parham の Willoughby 男爵の Hugh	48
資産の中核としての預託金	49
IV	54
加入手数料	54
前史	58
印紙税	63
相互債務	63
V	65
保険料	65
配当の代わりにボーナス	73
労働党と生命保険(The Times 1928 年 10 月 11 日付より)	78
経費率に関する Walton の計算式	81
家族収入保証保険の原理	88

コメント (0)

アクチュアリーというのは、生命保険や年金の色々な計算をする専門家ですが、その日本の大元締めは「日本アクチュアリー会」という組織です。私もこの会の正会員となっています。

日本アクチュアリー会には小さな図書室があります。ある日、保険数学の参考書を探してその図書室の蔵書を見ていたら、小さな本を見つけました。

“The birthplace and genesis of life assurance”

『生命保険の生まれたところと創世記』

というタイトルで、現代的な生命保険を始めたイギリスの Equitable という会社の、でき始めの頃の話を書いたもののようです。

読んでみてとても面白かったので、自分だけで独り占めするのは申し訳ないと思い、訳してみることにしました。

Equitable の創業は 1762 年。今から 250 年ほど前のことになります。本文にもありますが、この創業の少し後、アダムスミスが「国富論」を書き、書いてる途中でアメリカ独立戦争が始まり、アメリカが独立したと思ったら今度はフランス大革命が起こり、その総仕上げにナポレオンが登場する、といった時代のことで

す。250 年前というと大昔と思うかも知れませんが、明治維新の時からみるとたかだか 100 年ちょっと前のことです。そう思うとそんなに昔ではないかも知れません。

この Equitable という会社で死亡率を使った生命保険の保険料の計算が世界で初めて実施され、また保険数理の専門家という意味で「アクチュアリー」という言葉も生まれた、ということで、アクチュアリーにとっては非常に懐かしいような、思い入れのあるような会社です。

この Equitable 流の生命保険がその後、ヨーロッパ各国やアメリカで多くの会社に真似され、日本でも 1881 年に明治生命が始まった、ということですから、日本もそれほど遅れを取ったわけではありません。

以下、訳文に私の勝手なコメントを付けています。学者だったら「注釈」を付ける所でしょうが、とてもそんな几帳面さは持ち合わせていないので、注釈じゃなくて「コメント」だということでご容赦下さい。

全体の構成は、まず Equitable の会社のあった場所探しから始まります。大昔(この本が書かれたのが 1930 年代ですから、170 年くらい遡ったことになります。)に会社のあった建物を探し出すというのは、物好きといえば物好きでしかないのですが、それほどの思い入れが著者にはあったということでしょうか。

この場所探しの話は生命保険そのものにはほとんど関わりがありませんが、その当時のロンドンの様子を知るのに面白いと思います。また建物探しの経過がちょっと推理小説っぽい所もあるので、楽しめるかも知れません。

次に Equitable の初めの頃の話がいろいろ紹介されます。これを見ると様々な誤解や中傷、根拠のない噂話が山ほどあったんだということがわかります。

保険の仕事に関わった人の中には、自分も保険会社を作りたいと思う人が結構います。私は幸い以前、新しい保険会社作りに参加することができましたし、その後も新しい保険会社作りのお手伝いの仕事もいろいろしています。

この Equitable の話は、それまで生命保険会社というものになかった時に、初めて生命保険会社を作るという話ですから、なおさら面白い、興味深い話が盛り沢山です。

本筋は以上2つの部分なのですが、これだけじゃあ本にするには少な過ぎるということでしょうか、ついでに同じ著者の書いたエッセイが3つ、追加されています。

一つは英国の労働党政権が生命保険会社を国有化しようとした時に、著者がそれに対する反対意見をロンドンのタイムズ紙に寄稿したものです。

次は生命保険会社の事業費率(日本で我々は「対収保事業費率」と言っているものです)の計算式と、その修正の考え方についてのエッセイです。状況の変化に対応して計算式を有効に保つためにどのように変更させていくかと言う意味で、面白い読み物です。

最後は「家族収入保証保険」の話です。この本が出版されたのが 1937 年ですから、イギリスではもう 70 年も前に家族収入保証保険があったということになります。この保険の仕組みと有利・不利についての話ですが、やはり生命保険は税制の取扱いと切っても切れない関係があるということが良くわかる話です。

前置きはこれ位にして、本文にとりかかりましょう。

なお、本文の前に序文があるのですが、これを最初に読んでも面白くないでしょうから、後回しにします。

生命保険の生まれた場所（原文9ページ）

保存されている昔の議事録によると、エクイタブル生命 (the Society for Equitable Assurances on Lives and Survivorships, 今では The Equitable Life Assurance Society) の最初のオフィスは、1762 年から 1774 年の初めまで Nicholas 通りにあり、家賃は 1 年間 75 ポンドを Dr. Jeremiah Mills に支払っていた。

この通りは Lombard 大通りから Cannon 大通りに走っていて、昔は聖 Nicholas Acons 教会がそこにあり、そのためにその通りの名前がついたのだが、その教会は 1666 年の大火で焼けたあと建て直されなかった。その教会の墓地は今でも通りの西に見ることができる。

コメント(1)

ここからしばらくイギリスおよびロンドンに特有なことがいろいろ出てきます。

場所探しの話なので、通りの名前がいろいろあります。英語では通りにも大小いろいろな単語があるので、とりあえずここでは Street(大通り)、Lane(通り)、Court(小路)という具合に訳してみました。

また Equitable の建物は Saint Nicholas Lane にあったわけですが、この「Saint」は「聖」としておきました。これは原文では Saint が付いたり付かなかったりしているんですが、「聖」だと、はしょっても聖ニコラス通りがニコラス通りとなるくらいで、あまり違和感がなさそうですが、これがセントニコラス通りがニコラス通りになると、同じものか違うものかちょっと分りにくくなるかなと思ったからです。

ちなみに Saint Nicholas はキリスト教の聖人で、別名「サンタクロース」のようです。とはいえサンタクロース通りと言うとちょっと違った印象になってしまいそうなので、ニコラス通りにおきました。

またこれからお金の話が色々出てきますが、この頃のイギリスのお金の単位はポンドです。そして 1 ポンド = 20 シリング、1 シリング = 12 ペンスという 12 進法・20 進法の世界です。今では 1 ポンド = 100 ペンスという 10 進法になっていますが、1971 年まではこの 12 進法・20 進法の世界でした。メアリー・ポピンズが鳩に餌をやる歌で「タプンス」と言っているのは 2 ペンスのことで、1/120 ポンドということになります。

原文では〇ポンド〇シリング〇ペンスと言っているのを、そのままではわかりにくいと思うので、全てポンド単位の小数に直して()書きしてあります。この頃の 1 ポンドがどれ位の金額かというのは良くわかりませんが、とりあえず 10 万円位だとして読んでいって下さい。この換算レートが大き過ぎるか小さ過ぎるかは、以下の本文のいろんな金額の例で判断してみてください。

残念ながら議事録には「聖ニコラス通りにあった会社の事務所」とあるだけで、その通りのどの辺にあったか、どちら側にあったかについてすら何も書いてない。もしかするとその場所はその後 King William 大通りが作られた時の交差点にあったかも知れなかった。もしそうだとすると、場所を特定しようとしてもうまく行かなかたろう。

その正確な場所は 1935 年 12 月に確認されたが、それは今日のような姿の生命保険の生まれたところという意味で興味深い。しかし(それを探するのに)昔のロンドンの住所録(Kent の、あるい

は Baldwin の、あるいは Payne の住所録)を見ても役に立たなかった。

それは今の住所録と比べると貧弱な寄せ集めでしかない。たとえば Kent の住所録の値段は、初めたったの1シリング(0.05 ポンド)だった。ロンドンの大通りの建物は 1762 年頃から、すなわちロンドン橋の最後の家が取り壊された頃から番号が付けられるようになったが、1767 年になってはじめて「ロンドンのシティー・ウェストミンスター・サウスワーク区内の会社の重役・公職にある人・卸売商人・その他重要な貿易商である住人の名前と住所を、最近の議会の法律に従った住居の番号つきでアルファベット順に並べたリストである」という記述のある住所録(実際 Kent の住所録にそのような記述がある)が登場する。

さらに初期の住所録は会社の住所は含んでいなかった。そして生命保険会社の幹部はその当時それほど尊敬されているわけではなかったため、Baldwin の住所録にある「ロンドンのシティーおよびその周辺で取引や仕事をしている人達」の中には含まれていなかった。そのためそれらの住所録には、Equitable の初めの頃のアクチュアリーは一人も入っていないし、Dr. Jeremiah Mills のような専門家も同じように無視されている。

コメント(2)

上で「ロンドン橋の最後の家が取り壊された・・・」という記述があります。ロンドン橋には実際家が建っていたようで、というより他の都市でも橋に家が建っているというのはごく当たり前のことだったようです。フランスの例もイタリヤの例も本で読んだことがあります。

考えてみれば「橋」というのは道の途中ですから、道の両側に家が建ち並んでお店や住宅になっているのと同じように橋の両側に家が建ち並んで、1階はお店・2階は工場・3階は住居なんてのは珍しくないんでしょうね。

中国でも同じようで、この前中華屋さんに行ったらそんな感じの、橋の両側に家がびっしり建っている所を浮き彫りにした飾り物が壁にかかっていました。

日本では「橋」といったら五条の大橋で弁慶の薙刀を牛若丸がヒラリヒラリとかわしながら欄干に飛び乗ったりするんですが、欄干の代りに両側にビッシリ家が建ち並んでいて川を眺めることもできないとなったら、こんな場面はあり得ないですよ。

こんな何も見えない通りはもうあきらめて他を探そう(注:住所録から探すのはやめようということ)。Guildhall(ロンドン市庁)の図書館には下水道料金の集金人達の貴重なノートが集められている。この集金人達は Kent や Baldwin(の住所録)などと違って人を差別しないので、上流階級も下層階級も含めて料金を取り立てた人の全ての記録を残している。

この料金の帳簿は 1771 年のものから始まっているが、100 ページ程の Langbourn 区の中の 3 ページ半が「聖 Nicholas Acons 付近」となっている。名前は集金に便利なような順に並んでいるが、幸いなことに家の番号も記載されている。すなわち 34 番～39 番、18 番～23 番、1 番～11 番、25 番と 26 番、1 番と 2 番、27 番～37 番という具合だ。

名前が著名な商人のもので、その名前が(上記の)住所録にも載っている場合、その番号も同じものになっている。しかしその番号の殆どは Nicholas 通りのものだが、そのいくつかは(たとえば Abel Smith とか Rene Payne という銀行家の場合)Lombard 大通りのものだ。

そして記録には他のページに「Lombard 大通り付近」(聖 Edmund's?)という部分や「全聖職者、Lombard 大通り付近」という部分もある。その中で 1 番から 11 番は Nicholas 通りのもので、そこに一条の光が見つかる。4 番の家の家賃が 75 ポンド、すなわち Dr. Mills に支払われた金額と同じになっていて、料金支払者が John Edwards となっているのだ。

Equitable の最初のアクチュアリー William Mosdell は 1764 年に死亡し、その仕事は James Dodson に引継がれたが、彼は 1767 年に税関にポストを得た。そして彼のあとを引継いだのは John Edwards であり、彼は 1773 年 12 月に死亡するまでアクチュアリーであった。1792 年から 1799 年の間に出版された Horwood のロンドンの地図によると、Nicholas 通り4番というのは通りの西側にあり、その北側の墓地に接している。

もちろん 1771 年から 1799 年までの間に番号が付け直された可能性もあり得るが、ロンドンの大通りでは番号は殆ど変わってないし、Bishopsgate ではその例外となっているのは有名な話で、それは Bishopsgate Within と Bishopsgate Without を合体させた結果だ。

1772 年と 1773 年の下水道料金帳は失われていて、1774 年の料金帳には聖 Nicholas Acons 付近については番号が付いていないが順番は殆どその前の通りになっていて、1771 年に John Edwards がテナントだった所は 1774 年には John Vaughan と Ebenezer Robuck の名前になっており、それは Equitable がその年の初めに Blackfriars に移ったことと合致している。

住所録を 18 世紀の終わりまで比較してみると、明らかに引っ越した場合を除けば Nicholas 通りの住人の名前にはずっと同じ番号が付いている。

確証は聖 Nicholas Acons (教会) の 10 分の 1 税の帳簿からも得られた。その帳簿は 2 つの教区が合併して以来、Lombard 大通りにある聖 Edmund the King and Martyr 教会に保管されている。Nicholas 通り 1 番は Black Boy and Horseshoe という居酒屋で、家賃は 30 ポンドと安かった (Lombard 大通りの角でもあるのにもかかわらず)。2 番と 3 番は 1773 年には「空き家となり取り壊された」となっているが、それ以前の年の住人の名前は書き出してある。2 番の住人は 1760 年から 1764 年まで Thomas Watson で、そのあと Robert Irvine に代わっている。3 番の住人は 1751 年から John Read で 1764 年に Jane Monk に代わり、1765 年以降には Reginald Harriman に代わっている。それには「この家の正面は Lombard 大通り 20 番だ」という貴重な注釈が付いていて、番号は Lombard 大通りの終わりから順番に付いていることを実証している。

その次に Three Crowns 小路の 1 番と 2 番の住人の名前が載っていて、「1 番の正面は Lombard 大通り 22 番だ」という注が付いている。4 番と 5 番の間には「墓地」というマークが付いているので、4 番は戸建てであり、連続住宅 (テラスハウス) ではないことがわかる。それは「牧師館」とマークが付いていて、1761 年には空き家だった。ただし 1762 年の 10 分の 1 税支払人は Equitable の最初のアクチュアリーであった、William Mosdell だと記されていて、1765 年から 1773 年までは「生命保険会社」となっている。1774 年には 10 分の 1 税支払者は John Vaughan になっている。

コメント (3)

有名人の住所録から始まって下水道料金徴収簿、そしてついには 10 分の 1 税の帳簿とは、何とも面白い探索ですね。この 10 分の 1 税というのは教会に納める税金ですが、旧約聖書に遡る由緒正しい税金のようです。アダムスミスの国富論はちょうどこの本のテーマになっている Equitable 創業の頃書かれた本ですが、その中でも 10 分の 1 税のことがいろいろ書いてあります。

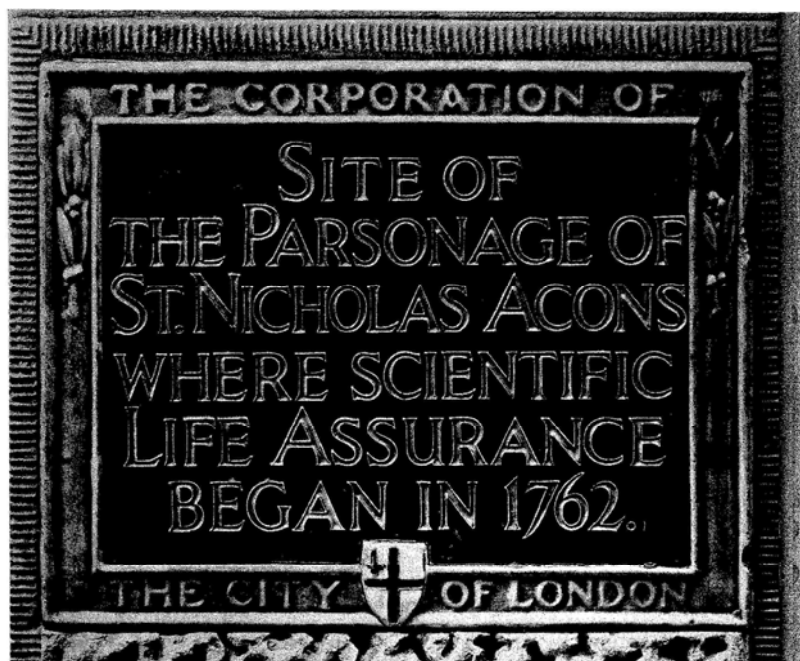
ここまでくると Equitable の書類の中に Nicholas 通りの建物の家主は Dean of Exeter だというメモが見つかる。だとすると何故家賃をお医者さんに払っているんだろう。しかし Dr. Jeremiah (の Dr.) は医者 докторなんだろうか。ひょっとして彼は神学博士で同時に神学部長なのだろうか (注: 神学博士も Dr. です。)。だとすると彼が牧師館の権利を持っているのも理解できる。特にもし彼が両方の教区の教区牧師であって、二つの牧師館のどちらか一方好きな方を使うことができると考えれば。

そこで我々は聖 Edmund 教会に行き、その壁に素晴らしい大理石の碑があって、Jeremiah Milles D.D.師が 1746 年から 1784 年に死亡するまで合併した教区の牧師であり、さらに Exeter 大聖堂の牧師でもあったことが記されていることを発見する。Dr. Milles はその最後の 15-16 年間は古物収集家協会の会長でもあったので、この関係で疑う余地もなく彼は余分の牧師館を貸すことを、古物収集家でもあり今で言えば Equitable の社長でもあった、Edward+Rowe Mores と話したに違いない。

その場所は現在は Westminster 銀行の Lombard 大通りオフィスのうしろの部分になっており、墓地をはさんで反対側は有名な London 生命のオフィスになっている。

終身保険の最初の契約がスターとしたのは、実際には Cornhill の White Lion という居酒屋であった。そこで Equitable の理事達は 1762 年に最初の 6 回の毎週の定例理事会を開き、27 件の契約申込を引き受けた。その時 Nicholas 通りのオフィスは準備中であった。その居酒屋は 1765 年に焼け落ちたが、それは現在の Union Bank of Scotland の後の方の建物の所で White Lion 小路に入ろうとする右側に建っていた。そしてそれは Bishopsgate に通じており、その小路の反対側は、伝承によるとロンドンで最初のキリスト教会であり、最初の司教がいたとされる S. Peter-upon-Cornhill だ。その聖具室には詳しい地図があり、それは Horwood の地図と同様に明瞭に牧師館が Three Crowns 小路により北側が分離され、南側は墓地により分離されていたことを示している。

注：この論文を発表した結果、ロンドンのシティは Westminster Bank の協力により Nicholas 通りの壁に次のような銘文の額を付けた。



4. Plaque on the site of the Society's first office, in Nicholas Lane

聖 Nicholas Acons の牧師館跡、ここで科学的生命保険が 1762 年に開始された。

コメント (4)

とりあえずここまでで第 1 部、Equitable の最初のオフィスのあった場所探しの話はおしまいです。原本は上記の額についてその文言だけが付いていたのですが、別の本にその額自体の写真があったのでそれを付けておきます。